

夜明け

キリストの臨在の使徒



『ドーンマガジン』

2026年7月

目次

夜明けの見どころ.....	2
教会——第1部	2
国際聖書研究.....	17
信仰深い百人隊長	17
ペテロの回復.....	20
イエスとザアカイ	23
マリア——忠実な母	26
キリスト者の生活と教理.....	29
神の像.....	29

聖書を開いて読み進めましょう！

教会——第1部

「あなたはペテロ。この岩の上に、わたしの教会を建てよう。死の力も、それを打ち破ることはできない。」

マタイによる福音書 16章18節

自らをキリスト教教会と称する団体は数多く存在し、その名称も多種多様であり、イエスとその使徒たちの教えに関して異なる種類の信仰を掲げています。こうした見解の相違を考慮する際、聖書が教会とは一体何であるか、またそれに関する神の御心は何かを問うことは、決して不適切ではないと考えます。どれが真の教会であるかを知る方法はあるのでしょうか。それとも、すべての教派が合わさって真の教会を構成しているのでしょうか。

「教会」という言葉は旧約聖書には登場せず、新約聖書で初めて使われたのは、冒頭の聖句にあるように、イエスがペテロに「死の力」もそれを打ち破ることはできないと告げた際でした。この聖句における「教会」という言葉は、ギリシャ語の「エクレシア (ekklesia)」の訳語であり、これは「呼び出された者たち」、あるいは「選ばれた者たち」を意味します。イエスは弟子たちに、「わたしはあなたがたを世から選び出した」（ヨハネ 15:19）と言われました。本質的に、教会とは、キリストの招きを受け入れ、世から切り離された人々の集まりです。

教会は建物ではありません。とはいえ、「教会」という言葉は、会衆が集まる場所を指すためにしばしば用いられます。もし、会衆のな集いの場所を表すのに「集会所」という表現がより広く使われていれば、教会という言葉そのものの真の意味に関して広く見られる誤解をいくらか和らげる助けになるかもしれません。

イエスの宣教活動において、イエスが「教会」という言葉を用いたのはわずか三回でした。一度はペテロへの言葉の中で、そして二度目は、弟子たちの間で生じうる誤解に対処するための適切な手順を教える別の機会においてでした。（マタイ 18:17）次にこの言葉が登場するのは、ペンテコステの日にペテロの説教によってキリストを受け入れた三千人の記述に続く、使徒行伝2章47節です。そこには、「主は救われるべき人々を日々教会に加えられた」と、ただそれだけを簡潔に記しています。

この単純な事実の記述には、深く考える余地がある。五旬節の日にだけで、三千人が「教会」の一員となり、その後も「毎日」新たな改宗者が加わりましたが、水による洗礼以外の、いかなる正式な入会式が行われたという記録はありません。これらの改宗者はすべてユダヤ人でした。使徒たちの説得力ある働きかけによって、彼らが自分たちの指導者たちが十字架につけたイエスが、まさに約束されたメシアであることを認めたとき、彼らはイエスを信じ、洗礼を受けました。

それだけの単純なことであった！その後、弟子たちの数が増え、互いに励まし合うために集まるよ

うになると、こうした人々の集まりは「教会」と呼ばれるようになった。使徒行伝11章22節には「エルサレムにある教会」と記されている。ローマ人への手紙16章5節では、パウロが「彼らの家にある教会」、すなわちプリスキラとアクイラの家にある教会に挨拶を送っている。

これらの聖句から、キリスト教の初期においては、信者の集まりは、その規模や場所にかかわらず、それぞれが教会と見なされていたことがうかがえます。実際、それらは教会でした。なぜなら、そのような信者の集まりは、福音によって、世から離れ、イエスの足跡に従うよう召された人々によって構成されていたからです。

これらの個々の集まりには、特定の教派名はありませんでした。それらはその所在地によって識別され、「エルサレムの教会」、「フィリピの教会」、「ローマの教会」、あるいは場合によっては、信者たちの誰かの家で集会を開いていた「教会」などと呼ばれていました。

『ヨハネの黙示録』第2章と第3章では、7つの教会が言及され、それらが所在する都市名によって特定され、特別なメッセージが送られています。これらの七つの教会は、象徴的な意味で、ペンテコステから現在に至るまでの様々な時代のすべての信者を代表していると考えられる根拠があります。これは「教会」という言葉のもう一つの、より広い用法であり、主が世から召し出され、主とその御業に仕える者と見なされる、あらゆる場所にいるすべての人々を表すものです。

イエスがペテロに、「死の力」は教会に打ち勝つことはできないと語られた際、その言葉には、より広範で一般的な意味が込められていました。エペソ人への手紙1章22節、23節で、パウロがキリストを「すべてのものの頭であり、教会、すなわちキリストのからだの頭」であると述べているのも、この適用に基づいています。パウロが「生ける神の教会、真理の柱であり土台」について再び記しているのは、まさにこの意味においてである。(テモテへの手紙第一3章15節)

コリントの信徒への手紙一12章12節、13節で、パウロは教会がキリストの「体」とであるという考えについて詳しく述べています。彼はこう言います。「人の体には多くの部分がありますが、それらの多くの部分が一つのかたちをなしています。キリストの体もまた、それと同じです。私たちの中にはユダヤ人もいれば、異邦人もおり、奴隷もいれば、自由な者もいます。しかし、私たちは皆、一つの御霊によって一つの体にバプテスマを受け、皆、同じ御霊を分かち合っているのです。」

入会方法

どうすれば教会の会員候補、すなわちイエスと使徒たちによって設立された教会の会員になれるのでしょうか。先に引用した使徒行伝2章47節には、「主は救われるべき人々を日々教会に加えられた」と記されています。これは、主の教会の会員となるのが主ご自身に依存していることを示しています。この点については、すべてのクリスチャンが認めることだと私たちは信じています。しかし、主はどのようにして教会に会員を加えておら

れるのでしょうか。また、主によってその教会に属する者と認められるためには、どのような条件を満たさなければならないのでしょうか。

簡潔に言えば、聖書は教会に近づくための段階として、第一に、私たちが罪の呪いを受け、滅びゆく人類の一員であり、それゆえに自分の義によって神の御前に立つことはできないという事実を、悔い改めて認めることであると示しています。（イザヤ**64:6**、マルコ**2:17**、使徒**26:20**）。次に、イエス・キリストを私たちの個人的な贖い主であり救い主として受け入れ、その流された血の価値によってのみ、私たちが神に受け入れられることができるかと悟ることです。（使徒**13:38,39**；**16:31**；ローマ**3:21-23**；**5:1**）

そして、贖い主の流された血の功績に対する確信に基づき、私たちは、神のな御心を行うために、何の留保もない献身をもって自分自身を神に捧げるよう招かれています。これを、自分自身を神に「奉獻」することと呼ぶことができます。この奉獻は、人に対してではなく、またいかなる地上の組織に対してもではなく、神に対してなされるものであることを強調しておきましょう。

この献身が私たちの生活において何を意味するかについて、聖書は極めて明確に述べている。イエスはこう言われた。「だれでも、わたしに従いたいなら [わたしの弟子になりたいなら]、自分を捨て、毎日自分の十字架を負い、わたしに従いなさい。」（ルカ**9:23**）。自分を捨てるということは、単に些細な楽しみや満足を短期間、あるいは一生涯にわたって断つことだけを意味するのではな

い。むしろ、その言葉が示す通り、完全な自己否定を意味します。これは、ペテロが三度、イエスを知らないことを完全に否定することをイエスが予告された際にも用いられたのと同じ言葉です（マタイ26:33,34）。したがって、自己を否定するとは、自分の意志を認める権利を完全に放棄し、その代わりに、キリストと聖書を通して示された神の御心を受け入れることです。

イエスの招きに応じて、自己を徹底的に否定する者たちに対する神の御心とは何でしょうか。それは、日々自分の十字架を背負ってイエスに従うという、イエスのさらなる招きの中に表されています。イエスは、死へと向かうことを示すために、十字架を背負うという象徴を用いました。イエスがこの招きを与えた時、イエスご自身が犠牲としてご自身の命を捧げておられました。その犠牲は、カルバリの丘で「すべては成し遂げられた」と叫ばれた時に完成しました。（ヨハネ19:30）

十字架を背負ってイエスに従うというキリストの招きを受け入れる者たちもまた、犠牲的な奉仕の中で自らの命を捧げます。キリスト教時代の初期には実際に十字架にかけられた人々もいましたが、全員が文字通り十字架にかけられるわけではありません。多くの人が他の形で殉教しました。しかし、主のすべての弟子にとって、結果がどうであれ奉仕し、苦難に耐えるという意志は、必ず持たなければならず、また持つことになるのです。

イエスの足跡に従うというこの事柄について、パウロは「キリストの死の似姿に共に植えられた」と述べている（ローマ6:5）。私たちがキリストに

出会う前は、「罪と過ちの中に死んでいた」（エペソ2:1）のである。しかし、キリストが流された血の功績に対する従順な信仰を通して、私たちはアダムの罪による裁きから解放される。それでも私たちは死ぬ。しかし、それは罪人としてではなく、イエスと共に犠牲となる者としてである。パウロはこの考えを次のように記している。「ですから、兄弟たち。神のあわれみによって、あなたがたに懇願します。あなたがたの体を、神に喜ばれる、生きた、聖なる、神へのささげ物としてささげなさい。それが、あなたがたの理にかなった奉仕です。」ローマ人への手紙12:1

キリストにバプテスマを受けた

ローマ人への手紙6章3、4節で、パウロは次のように記しています。「キリスト・イエスにバプテスマを受けた私たちは皆、その死にバプテスマを受けたことを知らないのですか。ですから、私たちはバプテスマによって、キリストの死と共に葬られたのです。それは、父の栄光によってキリストが死者の中からよみがえられたように、私たちもまた、新しいいのちを歩むためです。」ここで言及されているバプテスマは、水によるものではなく、キリストへの、そしてキリストの死へのバプテスマです。

新約聖書における「バプテスマ」という言葉は、「埋める」または「水に沈める」という意味のギリシャ語から訳されたものです。キリストへの私たちのバプテスマとは、私たちの意志をキリストの御心の中に埋めることです。それは死のバプテ

スマです。なぜなら、私たちがキリストと共に死ぬことが神の御心だからです。

黙示録20章4節では、この考えが「首を切られた」という言葉を用いて象徴されています。ここには、「イエスの証しと神の言葉のために首を切られた者たち」について記されています。これは文字通りの斬首を指すのではなく、頭（ ）に象徴される私たちの意志を捨て、キリストを私たちの頭として受け入れることを意味します。エペソ人への手紙5章23節；コロサイ人への手紙1章18節

パウロはこの点についてさらに詳しく述べ、「私たちはみな、一つの御霊によって、一つのからだにバプテスマを受けたのです」（コリント人への手紙第一 12:13）と語っています。私たちが主のもとに引き寄せられ、主の愛によって導かれて、自分自身を完全に主に献身するようになるのは、真理の御言葉を通して聖霊の働きによるのです。この献身とは、私たち自身の意志を捨て、キリストにある神の御心を受け入れることを意味します。したがって、もし私たちが死に至るまで神の御前に立つ立場に忠実であるならば、イエスは私たちの頭となり、私たちはキリストの体である教会の肢体となるのです。黙示録2:10

このようにして、神が御霊の力によって、キリストの教会に新たな会員を加えていかれることがわかります。私たち個人がなすべきことは、単に御霊の働きに従い、神の御言葉が示す歩み、すなわち悔い改め、キリストを受け入れ、神の御心を行うために自分自身を完全に献身して捧げるという歩みを踏むことだけです。

これらの段階を踏んだ後、神が私たちを受け入れ、教会の、すなわちキリストのからだの一員として認めてくださっているかどうかを知ることはできるでしょうか。私たちはそう信じています。パウロは、すでに引用した箇所、「バプテスマによってキリストの死と共に葬られ、父の栄光によってキリストが死者の中からよみがえられたように、私たちもまた、新しいいのちのうちに歩むようになる」と述べています。（ローマ人への手紙 6:4）。私たちは「新しいいのち」のうちに喜びをもって歩んでいるでしょうか。

またパウロはこう記しています。「だれでもキリストにあるなら、その人は新しい被造物です。古いものは過ぎ去り、見よ、すべてが新しくなったのです。」（コリント人への手紙第二 5:17）。私たちの人生の「過ぎ去った時代」に属する古いものは、もはや私たちにとって何の魅力も持たないという意味で、過ぎ去ったのでしょうか？（エペソ人への手紙 2:3）。私たちは、主の新しいもの——神への奉仕という新しい召命——新しい希望、新しい目標、新しい野心の中に、最大の喜びを見出していますか？

主への完全な献身というこの一步を踏み出した今、かつての友人や親族は私たちを理解できなくなるかもしれません。場合によっては、彼らは私たちを迫害することさえあるかもしれません。いずれにせよ、彼らは私たちの新しい生き方と調和できないため、以前と同じ程度の親密さを私たちに見出すことはできなくなるでしょう。私たちは彼らへの愛を少しも減らすことはなく、彼らのため

にできる限りのことをし続けるでしょうが、世の道と、奉獻された人々の道とは、しばしばかけ離れていることを学ぶことになるでしょう。私たちは今、そのような経験をしているのでしょうか？

パウロはまたこう記しています。「目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともないようなことを、神は御自身を愛する者たちのために備えておられます。」そして彼はこう付け加えています。「神は御霊によって、それらを私たちに啓示してくださいました。御霊はすべてのことを探り、神の深みさえも探り出すからです。」（コリントの信徒への手紙一 2:9,10）

主は、御言葉に含まれる驚くべき真理を、私たちが日々より深く理解できるよう導いてくださっているのでしょうか。キリスト・イエスにおける私たちの召しに関わる御言葉の「深み」は、私たちが主の御心を知り、それを行うよう努めるにつれて、より明確に理解されるようになっているのでしょうか。もしそうであるなら、主が私たちの献身を認め、義の道へと導いてくださっているという、さらなる証拠があることになります。

イエスご自身が、神の御前における私たちの立場について、極めて明確な保証を与えてくださっています。まず、イエスはこう宣言されます。「わたしのもとに来る者を、決して追い出さない。」（ヨハネ6:37）。そして数節後に、こう続けて言われます。「わたしを遣わした父が引き寄せてくださらない限り、だれもわたしのもとに来ることはできない。」（44節）。もし私たちがキリスト

を通して神の引き寄せる力を感じたのであれば、これ以上の保証が必要でしょうか。

まことに、私たちが歩んでいる新しい生き方の霊的な事柄に対する喜び、かつての肉や世の事柄への関心の喪失、世からのある程度の誤解、あるいは迫害さえも、霊的な事柄、特に私たちの天の召しに関わるものへの理解が深まっていくこと——これらすべてが、私たちの献身が神に受け入れられ、私たちが実際にキリストに「バプテスマ」を受けたという証拠なのです。

水のバプテスマ

水によるバプテスマの問題は、当然ながら、そして当然のことながら提起されます。なぜなら、イエスご自身が水によるバプテスマを受けられ、私たちはイエスの足跡に従うべきだからです。水によるバプテスマの目的は何でしょうか。洗礼者ヨハネは悔い改めのためにバプテスマを受けました。(マタイ3:11)。彼は、イエスがなぜバプテスマを求めたのか理解できませんでした。なぜなら、イエスが罪人ではなく、むしろ聖く正しい方であることを知っていたからです。マタイ3:13-15；ヘブル7:26

ヨハネのバプテスマは、ユダヤ民族の成員にのみ適用されるものでした。それは、神が全民族と結ばれていた契約、すなわちシナイ山で結ばれた契約への回帰を象徴するものでした。また、ヨハネのバプテスマは、その後キリスト・イエスの宣教が始まる際に、ユダヤ人がそのメシアを受け入れ

る準備をするためのものでもありました。マルコ1:4,5 ; ルカ1:13-17 ; 使徒13:24,25

イエスは罪の悔い改めのためにバプテスマを受けたわけではありません。ヨハネにバプテスマを授けてほしいと頼む際、イエスは単にこう言われました。「今はそうさせてください。このようにして、私たちはすべての義を全うするのがふさわしいからです。」(マタイ3:15)。私たちが水によるバプテスマを受ける際、従うべきはイエスの模範です。イエスにとって、それは犠牲的な死を遂げるというご自身の契約の象徴であり、また、もし忠実であると認められれば、死からよみがえるという希望の象徴でもありました。

水に浸されるという行為は、これら二つの考えをいかに的確に表していることか。洗礼を施す者に水の中に沈められる時、人はその手に委ねられ無力となり、水から引き上げられない限り、死のように水底に沈んだままとなる。それゆえ、私たちの献身において、私たちはキリストと共に死ぬために自分自身を委ねる。それは、イエスがそうであったように、私たちも復活において引き上げられ、御国の偉大な未来の働きにおいてキリストと共にある者となるという、神の約束に励まされてのことである。ローマ人への手紙 6:4,5 ; ピリピ人への手紙 3:10,11

したがって、水による洗礼は、私たちがキリストに真にバプテスマを受けたことの美しい象徴である。それは、救いの儀式であるという意味で不可欠なものではない。しかし、水による浸礼を受ける資格を正しく備えた人々は、すでに自分の意志

を捨て、主の御心を行うことを誓約しているので、これが主が彼らに求めておられる御心の一部であることを認識し、喜んでこれに従うであろう。それ以外の態度は、神の御心に対する、すべてを焼き尽くすような愛に欠けることを示していることになる。

教会の組織

聖書は、キリスト教の初期の時代に、召された者たちによる様々な地域グループが、複雑な組織体制を持っていたことを示しておらず、また、それが教会に対する神の計画であったとも教えていません。しかし、当時の弟子たちには、ある程度の組織がなかったわけではありません。彼らの集まりには秩序があり、それぞれの能力に応じて、様々な奉仕の役割が異なる人々に割り当てられていました。 マタイ25:15；コリント人への手紙第一14:40；テサロニケ人への手紙第二3:6,7；テトスへの手紙1:5

初代教会の組織において、イエスは万人に認められた「頭」でした。これは、イエスが弟子たちに「あなたがたの師はひとり、すなわちキリストであり、あなたがたはみな兄弟である」と語ったご自身の教えと一致するものでした。（マタイ23:8）。パウロは、「キリストは教会の頭であり、また、からだの救い主である」と記しています。（エペソ5:23）。また、コリント人への手紙第一11章3節でも、彼は同じ考えを示し、「すべての人の頭はキリストであり、……キリストの頭は神である」と述べています。

イエスは教会の頭であるだけでなく、その礎でもあります。「だれも、すでに据えられた礎、すなわちイエス・キリスト以外の礎を据えることはできない」とパウロは記しています。（コリント人への手紙第一 3:11）。教会の成員は「神の家族」とも呼ばれており、それは「使徒と預言者という土台の上に建てられ、イエス・キリストご自身がその隅の親石である」と宣言されている。（エペソ人への手紙 2:19,20）

使徒ペテロは次のように記しています。「それゆえ、聖書にもこう記されています。『見よ、わたしはシオンに、選ばれた尊い礎石を据える。彼を信じる者は、決して恥をかくことはない』」（ペテロの手紙一 2:6）。また、ヨハネの黙示録14章1-4節において、使徒ヨハネもまた、イエスがシオン、すなわち完成された教会における「隅の親石」であることを確証している。これは、「あなたはペテロである。この岩の上に、わたしの教会を建てよう」というイエスの言葉に付随してきた誤解を考慮すると、特に注目に値する。（マタイによる福音書 16:18）

この主張は、ペテロこそがキリストの教会が築かれる「岩」であるという意味だと誤解されてきました。しかし、イエスがこの言葉を述べられる際に二つの異なるギリシャ語を用いたことが分かると、この解釈は誤りであることが明らかになります。「あなたはペテロである」と言われた際、ペテロと訳されるギリシャ語は「ペトロス (petros)」であり、これは「岩の破片」を意味します。しかし、「この岩の上に、わたしの教会を建てよう

」と言われた際、イエスは「ペトラ (petra)」というギリシャ語を用いられました。これは「岩の塊」、いわば巨岩を意味します。

ペテロは直前にイエスに、「あなたはメシア、生ける神の子です」と告白していました (マタイ 16:16)。イエスはこの告白を喜ばれました。その意味をもう少し明確にするために、イエスがペテロに答えた言葉を言い換えてみましょう。「ペテロよ、あなたの名は、あなたが小さな岩の破片——いわば小石であることを意味している。あなたの名前の意味と比較すれば、私がメシアであり、神の子であるという偉大な事実は、巨大な岩の塊——大きな巨石——のようなものであり、教会はその土台として私の上に建てられるのだ。」

来月号の『ドーンマガジン』では、「教会」というテーマを取り上げます。議論される重要なトピックには、十二使徒や教会の他の奉仕者たちの役割、教会の使命、そしてキリストを通して全人類を救うという神の計画における天上の段階と地上の段階などが含まれます。

7月5日のレッスン

信仰深い百人隊長

鍵となる聖句：「イエスはこれを聞かれて、驚いて、従っていた人々に言われた。『まことに、あなたがたに言います。イスラエルの中でも、これほど大きな信仰を見たことはありません。』」
マタイによる福音書 8章10節

選読箇所：
マタイによる福音書 8章5-13節

キリストの地上の宣教期間中、ガリラヤのカペナウムで多くの奇跡を行われましたが、その中には百人隊長の僕を癒やされたことも含まれています。この記述には、その僕が善良な者であったという明記はありませんが、百人隊長が規律正しい人物であったと推測するのは妥当でしょう。そのような人物は通常、従順な僕を求めて、それを手に入れるものです。さらに、主との対話の中で、彼は自分のしもべたちが自分の指示通りに動くことに慣れていると述べた。異邦人でありながら、百人隊長はイエスにただ一言おっしゃるだけでよいと提案した。彼は、主には強力な力があり、癒すためにわざわざそのしもべのもとを訪れて触れる必要はないと信じていたのである。マタイによる福音書 8:5-9

今日の聖句は、イエスがローマの百人隊長の信仰に感嘆されたことを示しています。一方、

ユダヤ人たちは、イエスが彼らに長く約束されていたメシアであるという真理を信じることができませんでした。「あなたがたに言うておく。東から西から多くの人々が来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に食卓を囲むことになる。しかし、御国の子供たちは外の暗闇に放り出される。そこで、泣き叫び、歯ぎしりするであろう。イエスは百人隊長に言われた。『帰りなさい。あなたが信じたとおりに、あなたに成し遂げられるように。』すると、そのしもべはその時すぐに癒やされた。」マタイによる福音書 8:11-13

これらの言葉には、イエスの力には限りがないという教訓が込められている。さらに、私たちへのイエスの祝福は、信仰によってそれを受け入れる私たちの準備の度合いに比例する。なぜなら、「信仰がなければ」、神に喜ばれることは不可能だからである。（ヘブル人への手紙11:6）。したがって、信仰を行使できない者は、天からの召しのもとで与えられる祝福にあずかることはできず、神の栄光ある御国が地上に築かれる時を待たなければならぬ。マタイによる福音書6:10

天の御国のクラスの核心は、ペンテコステの日から3年半の間、すなわちコルネリウスが最初の異邦人改宗者として受け入れられる時まで、ユダヤ人によって構成されてきました。それ以来、以前は異邦人が神の恵みを十分に受けることを妨げていた、ユダヤ人と異邦人の間の「隔ての壁」は取り除かれました。（エペソ人への手紙 2:14）。その時から現在に至るまで、主はすべての国々から弟子たちを「招き」、集めてこられました。

ユダヤ人の中の信仰ある者たちは天の御国に与るものの、その民族全体としては拒絶され、世の「暗闇」の中に投げ込まれました。彼らは二千年近くもの間、「泣き叫び、歯ぎしりする」状態にあります。しかし聖書によれば、やがて神が恵みをもって彼らの罪を赦し、民族的な盲目から救い出す時が来るのです。（エレミヤ31:31-34）。彼らは、メシアの王国において、地上のすべての氏族と共に祝福されるであろう。創世記12:3; 28:14

神に奉獻された聖徒たちは、この驚くべき備えをどれほど喜ぶべきでしょうか。救いの申し出を受け入れ、永遠の平和と義を確立するという天の父の壮大な計画に従順に従うすべての人々は、地上で完全かつ永遠の命を得るでしょう。黙示録21:1-5

ペテロの回復

鍵となる聖句：「食事が終わると、イエスはシモン・ペテロに言われた。『ヨハネの子シモン、あなたはこれらの人たちよりもわたしを愛していますか。』ペテロは言った。『はい、主よ。あなたが、私があなただを愛していることを知っておられます。』イエスは言われた。『わたしの小羊を養いなさい。』」

ヨハネによる福音書 21:15

関連聖句：

ヨハネ18:15-18, 25-27; 21:15-17

復活後、四十日間の間、キリストは常に御臨在しておられたが、弟子たちには断続的にしか見えなかった。その間、キリストは弟子たちに御自身が復活されたことを確信させ、彼らの信仰を強め、御自身の昇天後の彼らの役割について指示を与えられた。そうした出来事の 하나가、「ティベリアス湖」、すなわちガリラヤ湖で起こった。ヨハネ 21:1

今日の聖書の箇所では、イエスが弟子たちに舟の右側に網を投げるよう指示された後、弟子たちは奇跡的な大漁を体験しました。彼らは当初、岸に立っておられる主を認識できませんでした。その後、「イエスが愛しておられた弟子」であるヨハネは、そこに立っている見知らぬ人が復活された

主であることを悟り、その確信をペテロに告げました。ヨハネによる福音書21章3-6節

行動派のペテロは、以前キリストを否認したことによる心の痛みを依然として抱えていたに違ありませんが、海に飛び込んで岸まで泳ぎ着きました。しかし、陸に上がると明らかに臆病な様子を見せました。彼は直接イエス（ ）のもとへ行くことはせず、待ってから、魚でいっぱい網を岸に引き上げるのを手伝いました。舟が岸に着き、しっかりと固定されて安全が確保されると、見知らぬ人が炭火を焚き、その上に魚を載せ、疲れ果てた者たちを「来て、食事をしなさい」と招いているのが目に入った。ヨハネ21:7-12

三度繰り返された同様の問いかけの最初において、私たちの鍵となる聖句は、イエスがペテロに、漁業よりも自分を愛しているかどうか尋ねたことを記している。イエスはその後、二度目に彼に言われた。「ヨハネの子シモン、あなたはわたしを愛していますか。」彼は答えた。「はい、主よ。あなたが、私があなを愛していることを知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を養いなさい。」三度目に、イエスは彼に言われた。「ヨハネの子シモン、あなたはわたしを愛していますか。」ペテロは、イエスが三度も「あなたはわたしを愛していますか」と尋ねられたので、心を痛めた。彼は言った。「主よ、あなたはすべてをご存じです。私があなを愛していることを、あなたはご存じです。」イエスは言われた。「わたしの羊を養いなさい。」ヨハネ21:16,17

ペテロについて考えるとき、私たちは、たとえ他の者たちが皆イエスを見捨てたとしても、自分だけは決してそうはしないと彼が言ったことを思い起こします。主が予言された通り、鶏が鳴くのを聞いたとき、彼の心はどれほど深く傷ついたことでしょうか。彼は主を三度も否み、口からはののしりの言葉が飛び出しました（マタイによる福音書26章69-75節）。これは、私たち人間のもろさと、互いに憐れみを示す必要性について、力強い教訓となっています。ガリラヤ湖のほとりでのこの出来事において、イエスはペテロとの対話の中で、実質的に彼を安心させようとしていたように思われます。そうすることで、主は、ペテロが将来、注意を払い、主のふさわしいしもべとして復職した後、その生涯の終わりまで犠牲の祭壇にすべてを捧げ続けるだろうという確信を示されたのです。

この事柄を十分に理解することは、きっと私たちが天の父に似た心へと導いてくれるはずです。私たちは、自分の行いにおいて公正で、義にかなった、清い者となるよう努めるだけでなく、他者に対しても憐れみ深くありたいと願うようになるでしょう。なぜなら、他者もまた、私たちと同じように困難を経験しているからです。詩篇136:1-26

イエスとザアカイ

鍵となる聖句：「イエスはその場所にたどり着くと、見上げ、その人を見つけて言われた。『ザアカイ、急いで降りてきなさい。今日、私はあなたの家に泊まるのだ。』」
ルカによる福音書 19章5節

選読箇所：
ルカによる福音書 19章1-10節

ザアカイは、エリコ地方に住む裕福な徴税人でした。ユダヤ人である彼は、徴税人が納税者をだますことで知られていたため、同胞から軽蔑されていました。さらに悪いことに、彼はローマ政府のために働いていました。イエスがエルサレムへ向かう旅の途中でエリコを通られたとき、ザアカイは「イエスがどのような方か見たかったが、背が低かったので、群衆の向こう側が見えなかった。そこで、イエスはその道を通って来られるのを見て、彼は先回りして、イエスを見るためにイチジクの木に登った。」ルカによる福音書19章3、4節

この鍵となる聖句は、イエスに人の心を読む力があつたことを示しています。ユダヤ人の見物人たちの高慢さは明らかでした。彼らは、自分たちが罪人だと見なしていたこの人物の家で、主が食事を共にしたいと望まれたことを知り、衝撃を受け

たのです。しかし、ザケウスは喜びをもってイエスを迎えました。ルカ19:6,7

ザアカイはその後、賠償について宣言しました。自分の財産の半分を貧しい人々に与え、自分が不当に扱った人々には四倍の賠償をする、と（ルカ19:8）。モーセの律法では、一般的に四倍の賠償を求められることはなく、通常は不当に扱った物の価値に五分の一を加えた額でした。（レビ記5:14-16；民数記5:5-7）。ザアカイはそれ以上のことをした。そこでイエスは、ザアカイの家に救いが訪れたと宣言された。これは、神の御用に使われるにふさわしい品性を示したことにより、神の視点から見れば、彼が神の恵みに回復されたことを示唆しているようだ。ルカ19:9

キリストに奉獻された信徒として、私たちはこの物語から自らの歩みに活かすべき教訓を得ることができます。これらは、私たちの思い、言葉、行いにおいて、主と非常に親密に歩む必要性を自覚させてくれるはずです。不完全な人間として、神の御霊によって生まれた子供たちでさえ、罪に打ち負かされる可能性があることを認識しています。そのような行為は意図的なものでない場合もあれば、部分的に故意であり、深刻な結果を招く可能性を秘めている場合もあります。罪の行いが生じたとき、私たちが神の完全な恵みに回復されるためには、それを認め、悔い改める必要があります。祈りと、心を聖なる思いで満たすことは、私たちの生活における罪の発生を予防し、あるいは減らすための二つの効果的な手段となり得ます。

ある著名なキリスト教作家は、この教訓について次のように述べています。「ユダヤの時代の終わり」と肉的なイスラエルに属していたこの出来事と、この時代の終わり」と霊的なイスラエルとの間に、類似点を見出すことができるでしょう。今日、私たちは、ザアカイが主の律法の契約から背いたように、主の恵みの契約から背いた者たちを見出します。彼らは、ある程度の罪の中に生き、自分たち自身も不正であり良心に反していると認めるような商売に身を置いているのを見かけるかもしれません。したがって、私たちは福音のメッセージ、すなわち大いなる喜びの良き知らせを携えて、彼らを素通りしてはなりません。もしそのような人々が現在の真理に関心を示すならば、私たちの主であり頭である方がザアカイを助けたように、私たちも彼らを助けようと努めなければならないのです。」

イエスとザアカイの体験には、私たちが他者、特に信仰の家族であるキリストにある兄弟姉妹と関わる際に、見習うべき素晴らしい模範が示されています。

マリア——忠実な母

鍵となる聖句：「しかし、マリアはこれらのことをすべて心に留め、思いめぐらしていた。」

ルカによる福音書 2章19節

選読箇所：

ルカ1:26-56、2:15-19、ヨハネ2:1-5、19:25-27

今日の学びは、カエサル・アウグストゥスの命じた人口調査のために集まった人々で溢れかえるベツレヘムから始まります。その群衆の中には、ナザレの大工ヨセフと、身ごもっていた婚約者のマリアがいました。彼らはローマの勅令に従うため、長い道のりを旅し、埃っぽい道を歩き、混雑した町で宿を探していました。ルカ 2:1-3

その近く、ベツレヘムからそう遠くない野原で、羊飼いたちのもとに神の御使いが現れ、救い主、主キリストの誕生を告げました。「すると、天使は彼らに言った。『恐れることはない。見よ、わたしは、すべての民に大きな喜びをもたらす良い知らせを告げ知らせる。きょう、ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方は主キリストである。』」天使のメッセージには、神を賛美する天の軍勢が伴っていた。ルカによる福音書 2章8-14節

その記述は次のように続きます。「天使たちが彼らを離れて天に帰ると、羊飼いたちは互いに言っ

た。『さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに告げられたこの出来事を確かめよう。』」

そこで、彼らは急いで行って、マリアとヨセフ、そして飼い葉桶に寝かされている赤ん坊を見つけた。彼らがその子を見たとき、この子について告げられたことを人々に広めた。それを聞いた人々は皆、羊飼いたちの話に驚いた。」ルカによる福音書 2:15-18

起こったことすべてがマリアにとって不可解なものであり、この鍵となる聖句は、彼女がこれらの出来事がどのような結末を迎えるのかと案じていたことを示唆しています。数ヶ月前に天使が、彼女に「ダビデの王座」を与えられる息子を産むと告げていたとはいえ、マリアは自分の息子に関わるこの神の計画の全容を、おそらく理解していなかったのでしょう。

さらに、マリアは当時、イエスがおおよそ33年後に十字架にかけられ、3日後に死からよみがえり、その後2000年かけて形成されていく信徒たちの集団の頭となることなど、予見できなかったでしょう。これらすべては、人類から罪と苦しみと死を根絶するという究極の目的のためでした。

キリストの階級の一員となるための継続的な努力の一環として、私たちはこの世に同化することを避け、他者によって「普通」と見なされる肉的な快樂に迎合しないよう注意を払う必要があります。それゆえ、次のように記されているのです。「上のことに心を留め、地上のことに心を留めてはなりません。あなたがたは死んでおり、あなたがたの命は、キリストとともに神のうちに隠されて

いるからです。」（コロサイ3:2,3）。罪ではない多くの行いも、肉を喜ばせるものです。イスラエルの民に与えられた特定の禁止事項とは異なり、新約聖書には「～してはならない」という命令は多く見られません。むしろ、なクリスチャンとして、私たちは心の中で愛の律法と義の律法の「精神」を全うすることを望みます。ローマ7:6

私たちはこの聖句の現実を体験できることを、まことに祝福されています。「愛する者たちよ。今、私たちは神の子です。私たちが将来どのような者になるかは、まだ明らかになっていません。しかし、彼が現れるとき、私たちは彼に似た者になることを知っています。なぜなら、私たちは彼をそのありのままの姿で見るからです。」ヨハネの手紙第一 3:2

神の像

「神は御自分の像に、神の像として人を創造された。男と女とを創造された。」

創世記 1:27

哲学者たちは、今日存在する人間は、歴史上かつてないほどに輝かしく、進歩していると説く。彼らの主張によれば、進化が私たちをこの地点へと導いたという。「各世代は前の世代よりもはるかに賢い」という主張は、科学者たちが計算によって、人類が数百万年にわたり地球上に存在し、世代ごとに進化してきたことを突き止めたことから導き出されたものです。世代ごとに進歩してきたことから、彼らは人類が今や非常に高いレベルに達したと結論づけています。この哲学は正しいのでしょうか。

宇宙の偉大なる創造主が、何が真理であり、何が単なる哲学であるかを見極めるための情報源を私たちに与えてくださったことを、私たちはどれほど喜んでいることか。主は私たちに「主の宮へ行こう」と招いておられ、その学びの宮に入ることから、人間に関する神ご自身の証しを見出すことができるのです。詩篇122:1

この情報源である聖書から、人間は「地から」来ており、神が「地の塵」から彼を形造られたことを学びます。（コリント人への手紙第一 15:47；創世記 2:7）。神が「いのちの息」を吹き込み、ある

いは注ぎ込むことによって、「人は生ける魂となった」。この人間の創造に関する簡潔な記述（ ）には、ある生命形態が別の形態から進化したとか、より単純な種がより複雑な存在になったといった示唆は、微塵も含まれていない。創世記第1章に記されているように、神はそれぞれの種を、互いに独立した異なる生命の形態として創造された。生命を支えるために地を整える各段階を経て、また植物、魚、鳥、地上の生き物たちがそれぞれ創造されるたびに、神は「それは良かった」と宣言された。創世記1:10,21,25,31

創世記1章26節、27節には、「神は言われた、『われわれの像に、われわれに似せて、人を造ろう』」と記されています。神の言葉には、複数形を用いた考えが示されていることに気づきます。「彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、……そして地を這うすべての這うものを支配させよう」。この宣言から明らかなように、神がご自身の像に似せて人間を創造されたとき、「神は彼らを男と女に創造された」とされたのは、アダムとエバの両方が、様々な点で神ご自身に非常に似通っていることを意味していたのです。

ヘブライ語における「像」と「姿」という言葉は、類似性や模範を意味します。人間は神の模範となるように造られました。では、完全な人間であったアダムは、どのようにして神の模範となったのでしょうか。それは、決して肉体的な面においてではありませんでした。私たちの創造主は、はるかに優れた存在——霊的存在——であり、人間はただの大地の肉なる被造物に過ぎません。しか

し、私たちの創造主は、ある点において、人間を御自身の像の反映として造られました。この類似性、すなわち像の一部は、理性を働かせ、記憶し、抽象的な概念も直截な概念も認識し、道徳的判断を下し、知的かつ審美的な資質を備えるという人間の能力にありました。

完全な人間であるアダムには、善悪を区別することを可能にする、神に似た良心の資質が与えられました。また、彼は自由意志を与えられ、選択の力を完全に発揮することができました。もしそうでなければ、人類は単なる機械に過ぎず、私たちの行動は他者によって支配されることになっていたでしょう。しかし、現実はそうではない。もしそうであったなら、能力や才能を発揮することも、個性を育む機会も存在しなかっただろう。もちろん、この選択の自由は、その用い方次第で、善にも悪にもなり得る。

アダムは罪を選んだ

アダム、すなわち最初に創造された輝かしい人間は、肉体的にも精神的にもあらゆる恵みに満ちていました。彼の周囲のすべては、彼の幸福を維持するために整えられていました。創造主はアダムに対し、もし神の正しい律法に従えば生き、もし神の公正な命令に背けば死ぬであろうと、極めて明確に告げました（創世記2:15-17）。創造主の指示は極めて単純なものでした。エデンの楽園で永遠に生きるにふさわしいかどうかの責任は、アダム自身の選択の自由にかかっていた。悲しいことに、彼は不従順によって罪を選ぶように導かれてしまいました。その完全さからの墮落の結果

、アダムとエバが生み出した全人類は、罪の中に生まれ、相続によって死の罰の下に置かれることになりました。（詩篇51:5、ローマ人への手紙5:12）

罪と死の支配は続いており、神がこれを許された目的が果たされ、それが終わるべき時が来るまで、続くでしょう。神は御自身の愛により、すべての人のために「死を味わう」こととなる贖い主、救い主、すなわち御自身の愛する御子イエス・キリストを備えてくださいました。（ヘブル人への手紙2:9）。人間の義にかなった死の宣告からの救いのためのこの備えは、無償の恵みの「賜物」でした。ローマ人への手紙5:15-18

私たちの最初の両親の罪への墮落の結果として、そしてそれ以来の長い世紀を経て、初めから人間を創造主の像として特徴づけていたそれらの資質は、全人類のうち、顕著な程度で見出されるのは比較のごく一部に限られている。確かに、神の威厳ある御性質に由来するそのような恵みを育もうと努めてきた高潔な人々もいれば、単に神に似たような外見を装っているだけの人々もいる。この外見は、表向きは好ましい振る舞いをもたらすかもしれないが、神が私たちの最初の両親を創造された際の、真の品性の純粹さは、彼らの心の中にほとんど存在しないかもしれない。

神は真の徳を欠く者とは共に働くことができないため、ご自身の計画を実現するために、その存在の核心から慈悲と愛の資質を示してきた人類の中から、熱心に選ばれた人々を探し求めてこられました。神は時代を超えてこれらの人々を恵み、ご

自身の計画の成就を成し遂げさせてこられました。その生涯の大部分において、こうした優れた資質の一部を示した、恵まれた人物の一人について考えてみましょう。それはダビデの息子、ソロモンです。

ソロモンから学ぶ教訓

晩年のソロモンは、自らの選択の自由ゆえに多くの妻たちの要求に翻弄され、その結果、神を大いに不快にさせてしまいました。しかし、若き日の彼は神から大いに恵まれていました。ソロモンは、父ダビデから思慮深さ、統治能力、そして主の恵みへの感謝といった資質を受け継いでいたようです。これらは、ダビデが以前、聖なる預言者ナタンの足元で学んだものでした。

ダビデが年老いて統治する力が衰えた時、息子のソロモンは、わずか二十歳の若さで、イスラエルを治めるという重い責任を引き受けた。私たちは、ダビデが愛する息子のために捧げた祈りの深さを十分に理解できる。息子を持つ父親であれば、ソロモンに対するダビデの心配りを容易に共感できるだろう。私たちもまた、息子たちに対して同じ思いを抱いている。すなわち、彼らが神の御目にかなう恵みを得、神と共に正しく歩むことができるようにと願っているのだ。

歴代誌第一28章9節、10節には、ダビデが息子に語った言葉が記されている。「わが子ソロモンよ、あなたの父の神を認め、心を尽くし、魂を尽くして、喜んで主に仕えなさい。主はすべての心を探り、すべての思いとすべての考えを知っておられ

るからである。もしあなたが主を求めれば、主はあなたに見出される。しかし、もしあなたが主を捨てれば、主はあなたを永遠に拒まれる。今、よく考えなさい。主はあなたを選んで、聖所となる家を建てさせようとしておられる。強くあれ。そして、その業を成し遂げなさい。」

主は、ダビデの生涯の夢であった聖所の建設のために、ソロモンを選ばれた。神の忠実な預言者ナタンの助けと助言を受け、また神の御心に適う者として、ソロモンは父の神殿建設計画の精神をすぐに理解した。彼は、イスラエルの繁栄が、神の律法への従順と、エホバへの礼拝にかかっていることを知っていた。

知恵を求めるソロモン

神への深い愛に満ちたソロモンは、ギベオンで千頭の全焼のいけにえをささげた。彼は神を喜ばせたいと強く願い、その創造主へのこの大いなる捧げ物を用意したのである。ギベオンにいる間、この若き新王は夢を見、その中に主が現れた。（列王記上3:5）。神はソロモンに、「私に与えてほしいものを何でも求めなさい」と言われ、ソロモンの答えは美しいものでした。それは、愛に満ちた心からしか生まれ得ないものでした。ソロモンは言いました。「私はまだ幼子に過ぎません。自分の務めをどのように果たせばよいのか分かりません。……どうか、あなたのしもべに、あなたの民を裁くための分別ある心をお与えください。そうすれば、私は善悪を見分けることができます。このあなたの大いなる民を、いったい誰が裁くことができるのでしょうか。」列王記上3章7-9節

神は、ソロモンの心の真摯な表れを喜ばれました。神はその願いに素晴らしい形で応え、ソロモンに「知恵と分別のある心」を与えられました。不完全な人間の中で、ソロモンほど賢明に裁くことのできる者は、その後二度と現れませんでした（列王記上3:10,12）。その利己的でない願いゆえに、神はさらにこう約束されました。「また、あなたが求めなかったもの、すなわち富と栄誉も与えた。あなたの生涯において、あなたのような王は他に現れないであろう。もしあなたが、あなたの父ダビデが歩んだように、わたしの道に歩み、わたしの定めと戒めを守るなら、わたしはあなたの生涯を長くする。」（列王記上 3:13,14）

ソロモンは夢から覚めると、自分の願いが神に喜ばれたことを実感し、喜びに満たされた。彼はエルサレムに行き、契約の箱の前で平安のいけにえと全焼のいけにえをささげた。（列王記上3:15）。その後まもなく、彼は主の指示に従い、イスラエルの神殿を建設するという偉大な事業に着手した。

神殿の建設

神殿の石や木材はすべて、あらかじめ準備され、形を整えられ、それぞれの設置場所が印され、準備が整って初めて建設現場に運ばれたことを思い起こそう。すべての部品は完璧に合い、ハンマーの音も、斧の音も、鉄の道具の音も一切なく、一つひとつが次々と組み合わされていった。（列王記上6章7節）。この偉大な神殿の各部分は異なる場所で準備されていましたが、建設予定地へ運ばれた際、何も変更する必要はありませんでした。

これはクリスチャンにとって、なんと素晴らしい教訓でしょうか！私たちは、気ままに時を過ごしていても構わない、そして人生の終わりに差し掛かった時、突然、奇跡的に、王の神殿における自分の場所にふさわしい者になれるなどとは、一瞬たりとも考えてはなりません。今こそが準備の時なのです。私たちは今、主が御自身の霊的な神殿において私たちのために用意しておられる特別な場所のために、形作られ、彫り出され、磨き上げられ、数え入れられなければなりません。

私たちは、ソロモンの神殿が、より偉大な構造物を象徴していたことを悟ります。「あなたがたは、生ける神の神殿です」とパウロは言いました（コリントの信徒への手紙二 6:16）。神の霊的な神殿の準備のために形作られ、労苦する時は、今なのです。（コリント人への手紙第一3:9；エペソ人への手紙2:10；ピリピ人への手紙1:6；2:12,13）。すべての部品、すなわち聖徒たちが、この「曲がりくねり、邪悪な」世の中で、クリスチャンとしての生涯を通じて整えられ、準備が整ったとき、彼らは象徴的な天の神殿におけるそれぞれの適切な場所に組み込まれるのです。ピリピ人への手紙2:15

ソロモンの神殿の奉献には、多くの喜びに満ちた祝賀が伴いました。（列王記上8:65,66）。神の霊的な神殿であるキリストが完成し、組み立てられ、神の栄光がその中に入られる時、天と地には大きな喜びが満ちるでしょう。その神殿の完成によって全地が恩恵を受け、祝福されるのです。それは、ソロモンの治世の下で、肉的なイスラエルが

繁栄の絶頂に達したのと同様です。（エペソ人への手紙 2:19-22；ヨハネの黙示録 3:12；21:22-26）

私たちの時代

ここで、人生のこの時点における賢王ソロモンについての一時的な考察を終え、現代の私たち自身について再び考えてみましょう。天の父の招きは、神ご自身に似た人間の本来の性質を多少なりとも備えている人々に対して、今もなお向けられていることがわかります。神への愛と従順という本来の資質を持つ人々は、ソロモンや過去の時代の他の高潔な人物たちよりも、さらに偉大な招きと奉仕に応えているのです。今もなお、神に献身し、神の独り子に倣って歩むために生涯を神に献げる人々がいるという事実そのものが、この召し出しの働き、そしてそれに関連する磨き、彫り込み、形作りの作業が、今もなお続いていることの証拠となっています。私たちは、これこそが、天の父がはるか昔に提示された救いの計画を成し遂げるための方法であることを悟ります。さらに、神を愛する者たち、すなわち神の御計画に従って召された者たちにとって、すべてのことが共に働いて益となることを知っています。「神はあらかじめ知っておられた者たちを、御子の姿に似せられるようにとあらかじめ定めておられました。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となるためです。」ローマ人への手紙8章28、29節

この聖句は、あらかじめ定められた一群——すなわち教会——が、父なる神の写しであり像である御子の写し、像でなければならないことを教えています。クリスチャンとして、私たちこの世の者

は、どれほど懸命に、長く努力しようとも、イエスのように完全になることはできません。また、私たち自身の選択によって、この榮譽を自ら手にすることもできません。もし私たちがイエスの足跡をたどる者となるよう招かれたのであれば、この榮譽は神によって私たちに与えられたものです。テサロニケ人への手紙第一 2:12；ヘブル人への手紙 5:4

このことは、この問題に光を当ててくれます。なぜなら、私たちの仲間のクリスチャンたちを見て、彼らが私たちと同じ招きを受けたことを悟るとき、私たちはそれに応じて彼らの交わりを大切にようになるからです。私たちは感謝の心をもって父なる神の招きを受け入れました。イエスの犠牲という神の恵み深い備えによって、私たちはこの関係に入ることが可能になったのです。そうすることで、また、私たちの不完全さを覆うために救い主の義の衣をまとい、イエスの身代金の犠牲の功績によって神に受け入れられる者となることで、私たちは喜んですべてを奉獻し、たとえ自分自身に大きな犠牲が伴うとしても、天の父に喜ばれる行いを始めようとするのです。イザヤ書 61:10；ローマ人への手紙 12:1；エペソ人への手紙 1:5-7

この重要な一步を踏み出す前に、私たちは祈りつつ、イエスの足跡に従い、イエスの模範となることの意味を熟考していなければなりません。私たちの思いは、上のことに向けられていなければなりません。（コロサイ3:2）。新しい意志、新しい心は、御霊の実と恵みを育まなければなりません

。イエスの模範となるためには、常にこれらの品性を育み、示すよう努めなければなりません。（ガラテヤ5:22,23；ペテロ第二1:5-7）。神に喜ばれ、主の御霊と調和するあらゆる心情を追い求めなければなりません。もっとも、それは天の父の形作る御手のもとで、生涯をかけて育まれていくものですが。

主、真理、そして兄弟姉妹への愛を示すだけでなく、世界に対する愛に満ちた、思いやりのある配慮も持たなければなりません。主イエスに似た者となるためには、嘆き悲しむ被造物、さらには私たちに侮辱し、虐待しようとする敵たちに対しても、深い配慮を持たなければなりません。マタイ22:37-39；ヨハネ13:34,35；ルカ6:27,28

心の従順

箴言4:23にはこう記されています。「あなたの心を守りなさい。命の泉はそこから湧き出るからです。」イエスの足跡をたどる者たちにとって、神の霊的な神殿の一部となる権利は、今、私たちがどのように心を育むかによって決まります。私たちはこの「土の器に納められた宝」を持っており、世の重荷や肉の弱さが、私たちを目標から引き離そうとします。（コリント人への手紙第二 4:7）。しかし、父アダムやソロモン王、さらには私たちの主イエスと同様に、私たちにも、誰に心の従順を捧げるかを定める自由意志があります。私たちは、主や真理、あるいは兄弟姉妹に仕えるよう強制されたわけではありません。それは私たちの自由な選択なのです。イエスに目を留め続けることで、私たちはイエスのようになることができます

。イエスが歩まれた道を歩みたいという私たちの願いは、崇高なものです。私たちの目標は、父がこれほど恵み深く招いてくださった神殿のその場所を満たすことであり、それは、愛する御子の姿に似せられることによつてのみ達成できるのです。ローマ人への手紙**8:29**；コリント人への手紙第二**3:18**

もし私たちが忠実であれば、霊の存在として復活し、「よくやった、良い忠実な僕よ。わずかなことに忠実であったから、多くのことを任せる。主の喜びにあずかれ」（マタイ**25:21**）という言葉を書くという、驚くべき特権に恵まれたとき、その経験はどのようなものになるのか、と私たちは考えたことがあるかもしれません。聖書はこの点について、確かな情報を与えてくれています。

ベールの向こう側

使徒パウロはこう語っています。「もし私たちが、[イエスの]死の似姿に結ばれたのなら、復活の似姿にも結ばれるのです。」（ローマ **6:5**）。復活後の主の「似姿」とは何でしょうか。ヘブル人への手紙**1章3節**は、イエスが神の「完全な現れ」、すなわち神の完全な写しであると教えています！ イエスの犠牲と奉仕の足跡を忠実に歩み、「善を行うことに忍耐強く励み、栄光と誉れと不死を追い求める」人々は、彼らの主であり頭である方ようになるでしょう。すなわち、神の神聖な家族の一員となるのです。ローマ人への手紙**2章7節**

「神の完全な像」という表現に関しては、さらに考えなければならない点があります。確かに、私たちの主は、人間となる前の天使としての状態、

すなわち「ロゴス」として、父なる神に似た姿をとっておられました。人間としてこの地上にいられたときでさえ、主は神の似姿にありました。なぜなら、主の御性質は常に御父の御性質と完全に調和していたからです。しかし、使徒パウロは、イエスが「十字架の死に至るまで従順であり」、今や「天の高き御座の右に座しておられる」と語っています。このゆえに、神はイエスを高く上げ、すべての名にまさる名を授けられました。イエスは今や、目に見えない神の「完全な像」として、神の性質を分かち合い、かつて以上に完全な姿をとっておられます。ヘブル人への手紙1章3節；ピリピ人への手紙2章8、9節；コロサイ人への手紙1章15節

また、次のように記されています。「見よ、父が私たちにどのような愛を注いでくださったか。すなわち、私たちが神の子と呼ばれるようにしてくださいましたのです。それゆえ、世は私たちを知りません。世が父を知らなかったからです。「愛する者たちよ、今、私たちは神の子です。私たちが将来どのような者になるかは、まだ明らかになっていません。しかし、彼が現れる時[ギリシャ語：明らかにされる時]、私たちは彼に似た者となることを知っています。なぜなら、私たちが彼のそのありのままの姿で見るからです。そして、この希望を彼に置く者は皆、彼が清いように、自分自身を清めます。」ヨハネの手紙第一 3:1-3

このように、私たちの天の父は今も、そして永遠にすべてにまさっておられるが、私たちの主イエスは今や、神の完全な姿と似姿となっておられる

ことがわかります。（ヨハネ10:29、14:28、1コリント15:24-28）。イエスは、その忠実な奉仕ゆえにこの報いを受けられました。いかなる代償を払おうとも、御父の御心を行うことへの従順において、イエスは決して揺らぐことがなかったのです。神はイエスを高く上げられました。そして、イエスの花嫁であり、その体である教会の「召され、選ばれ、忠実な」会員たちに対しても、同じようにしてくださることを喜ばれています。（黙示録17:14；19:7,8；21:2；コリント人への手紙第一12:12,27）。彼らは主イエスの姿に似た姿で復活するのです。これは、私たちが死に至るまで従順で忠実であれば、受け継ぐことができ、また受け継ぐことになる、素晴らしい約束です！（黙示録2:10）。パウロは次のように述べています。「あなたがたは、古い人をその行いととも脱ぎ捨て、創造主の御姿に倣って、知識によって新しくされた新しい人を着たのです。」 「私たちが地上の者（アダム）の姿を帯びていたように、天の者（神の似姿）の姿も帯びるようになるのです。」コロサイ人への手紙3章9、10節；コリント人への第一の手紙15章49節